

女をうしなう光源氏

——前史、父桐壺帝の喪失体験——

上 野 辰 義

一 はじめに

二 父桐壺帝の喪失体験

三 父桐壺帝と息子光源氏の喪失体験

光源氏が晩年に最愛の妻紫上を喪ったことは、彼の人生で最大の空前絶後の哀しみと認識された。それはどのような処からどのように認識されたのか。その喪失体験のさまは、紫上が亡くなる御法巻から光源氏が紫上の追慕をし続ける幻巻の光源氏のさまを追っていけば、基本的に理解されるところのもののだが、一方、空前絶後の人生最大の哀しみの位相は、他の喪失体験と比較せねば理解も出来ない道理だろう。本稿ではその比較の前提の一つとして、父桐壺帝の喪失体験の様子を検討する。

一 はじめに

光源氏の恋愛生活は、多くの女性たちを獲得する人生であると同時に、また一方、というより、それゆえに、多くの女性たちをおのれの目の前からみすみす喪つていく人生であった。その最大の事件は、御法巻光源氏五十一歳の年に、宣長の年立によればあしかけ三十四年苦楽をともしてきた紫上を四十一歳、あるいは四十三歳で喪つたことであらう。

紫上は、若菜下巻における女樂の行事が行われた翌晩、大病に陥り、一時は絶息するに至る。その後、光源氏の懸命の処置により蘇生するが、病状は一進一退を続け、次第に衰弱していった。そして、御法巻冒頭では、

紫の上、いたうわづらひ給ひし御こちの後、いとあつしくなり給ひて、そこはかとなく悩みわたり給ふこと久しくなりぬ。いとおどろおどろしうはあらねど、年月かさなれば、たのもしげなく、いとどあえかになりまさり給へるを、院の思ほし嘆くこと限りなし。しばしにてもおくれきこえ給はむことをばいみじかるべくおほし、
(御法一三八)¹⁾

と、光源氏が、紫上との死別を意識するまでになる。つまり、光源氏は、若菜下巻で紫上の死、すなわち精神分析学

にいう、「対象喪失」(object loss)、「近親者の死や失恋をはじめとする、愛情・依存の対象の死や別離」・「住みなれた環境や地位、役割、故郷などからの別れ」という体験を、一時的にせよ行い、さらに、御法巻冒頭時までには、紫上の死を予期して、これも同じく、「予期による悲哀」(anticipatory mourning)・「予期悲嘆」(anticipatory grief) などと呼ばれる、喪失が予期される場合、実際に喪失以前に喪失に伴う悲嘆が開始し、喪失に対する心の準備が行われ、それによって、現実の死別以前にある程度心の準備ができるため、実際の喪失後に生じる悲嘆からの回復が比較的速くなる、ともいわれる心情をいだくようになっていた。

このように、光源氏は御法巻で紫上と最終的に死別する以前に、若菜下巻での紫上大患時に一時的にせよ、既に紫上に関して喪失体験を持ち、その後も紫上の死について「予期悲嘆」を示すというように、紫上を喪うことについては、ある程度防衛的な心的態度が構築されていたと思われる。であるのに、現実には紫上を喪うと、その悲嘆は、光源氏の人生において空前絶後のものと、自覚されたのである。

つかうまつりなれたる女房などの、ものおぼゆるものなれば、院ぞ、なにごともおぼしわかれずおぼさるる

御こちをあながちに静め給ひて、限りの御ことどもし給ふ。いにしへも、悲しとおぼすこともあまた見給ひし御身なれど、いとかうおりたちてはまだ知り給はざりけることを、すべて来しかたゆく先たぐひなきこちし給ふ。やがて、その日、とかくをさめたてまつる。

（御法一三九三）

光源氏は惑乱に陥りながらも、紫上の即日葬送に向けて、恐らくは、仕え慣れた侍女が本来ならばするところであろう遺体の最後の世話をも含め、こまごまとした葬儀の準備を自らが執り行わなければならないという初めての体験を、この時した。そうしたことにより、空前絶後の類例のない悲しさを抱くに至ったという。この悲しさは、葬送準備の執行の有無にかかわらず、その後の服喪の日々の中でも、光源氏にとって、類例のないものと自覚される。いわゆる御法巻の光源氏の述懐の部分に、同様の物言いが見える。

いにしへより御身のありさまおぼし続けるに、鏡に見ゆる影を始めて、人には異なりける身ながら、いはけなきほどより、悲しく常なき世を思ひ知るべく仏などのすすめ給ひける身を、心強く過ぐして、つひに來し^{（一）}かたゆく先も例あらじとおぼゆる悲しさを見つるかな、

（御法一三九五）

こうして、光源氏は、紫上の死に関し、若菜下巻で一時的にせよ既に喪失を体験し、御法巻冒頭時までには、予期的態度を構築していただろうとみられる状況にあった。であるにもかかわらず、紫上を喪つたことは、空蟬・夕顔以来の幾多の女性たちとの喪失体験よりも、最大の、そしてこの後もないであろう悲しみをもたらしたと、光源氏によって自覚された。これはどのような事情を潜めていることなのであろうか。光源氏にとって、紫上の喪失は、他の女性たちとのそれとどう繋がり、異なるというのか。それを見ることで、光源氏にとつての紫上の意味が、また新たに明かになると期待される^{（二）}。

二 父桐壺帝の喪失体験

光源氏の喪失体験の歴史・蓄積のさまを見る前に、彼の父である桐壺帝の、光源氏の母桐壺更衣に関する喪失体験の様相を見ておくべきだろう。何故なら、益田勝美氏は、桐壺帝と桐壺更衣の物語を、桐壺帝から光源氏へと、真実な愛にひたされて生きたいと悶える心を受けつぐ生き方の系図として物語ろうとしたのだと、位置づけられたが、母と祖母を幼くして喪つた光源氏は、元服後も宮中の曹司桐壺に、「母御息所の御方の人々、まかで散らずさぶらはせ」（桐壺二八）て、生前の母と父の物語を幾度も耳にしたと

思われ、両親の物語は、光源氏の心に沈潜していたはずだからである。また光源氏の自発的な女性関係には、父桐壺帝の影が見え隠れする。藤壺の宮は言うに及ばない。空蟬は、故衛門の督が宮中へ入れようと桐壺帝に奏上していた娘であったし、六条御息所は、夫前坊の他界後、桐壺帝から、娘斎宮を父替わりに養育することを口実にして、「内裏住み」、すなわち宮中へ入ることを勧められていた存在であった（葵三〇八）。さらに、花散里は、桐壺帝の麗景殿の女御の妹で、「内裏わたりにてはかなうほのめきたまひし」、恐らく姉の内裏滞在中に、姉の伴、あるいは姉に直面するため、宮中に上がり、父帝の関係で麗景殿を訪れた光源氏と知り合い、私情を通じたのである。正式の婚儀を経ない、六条御息所ともども私情でつながる「隠ろへ忍ぶ」女性であった。これらの女性たちとの交渉を通して、父桐壺帝と繋がろう、あるいは対抗しようという、アンビバレントな光源氏の意識あるいは無意識の欲動を見ておくことは、全く不可能なことではない。父帝の女性関係は、光源氏の対女性行動に、意識無意識を通して、影響を与えていたであろうと思われる。加えて、欠かせない理由として、桐壺帝における桐壺更衣の喪失体験と、光源氏における紫上の喪失体験とは、残った男が去った女の魂の所在の探索を、長恨歌の「幻」術士に託す内容の詠歌を二人なが

らにしているという呼応がある。これは、光源氏が、桐壺巻壺前栽の段の場にいた「心にくき限りの女房四五人」、そこに帰参した鞍負の命婦、光源氏の元服後も彼の曹司淑景舎にとどまって光源氏に仕えた桐壺更衣付きの侍女たちなど、宮廷の住人などを介して、父帝のその歌語りを聞き知っていたのならば、なおさら明白な光源氏による意識的な呼応となる。

こうして、父桐壺帝の喪失体験は、子光源氏の喪失体験を理解するうえで、重要なものである。

桐壺帝と桐壺更衣の置かれた状況は、桐壺巻、というより源氏物語冒頭の叙述で、明確だ。桐壺帝は、帝王でありながら、「女御、更衣あまたさぶらひ給ひけるなか」で、後宮の秩序を顧みず、「いとやむごとなききはにはあらぬ」更衣を、「すぐれて時め」かせていた。そのため更衣は、他の、家の期待と自身の誇りを高くもって入内してきた女御たちや、同等・格下の更衣たちの嫉妬や恨みを負って病がちになり、実家に下がるが多くなるのだが、帝はそうした更衣を「いよいよあかずあはれなるものにおもほして、人のそしりをもえはばからせ給はず」と、後宮・廷臣・貴族社会の非難を考慮して自制する、ということができない状態に陥る。

この、桐壺更衣に執着して、それを自制できない桐壺帝の具体的な状態は、更衣との今生の別れ、更衣が宮中を退出する場で示される。

「限りあらむ道にも、おくれ先だたじ、と契らせ給ひけるを、さりともしうち捨てては、え行きやらじ」との給はするを、女もいといみじと見たてまつりて、

「限りとて別るる道の悲しきにかまほしきは命なりけり

いとかく思ひ給へましかば」と息も絶えつつ、聞こえまほしげなることはありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば、かくながらともかくもならむを御覧じはてむとおぼしめすに、

(桐壺九)

この場における、桐壺帝の詞中の「限りあらむ道」、桐壺更衣の歌中の「限りとて別るる道」は、多義的に用いられてもいるが、死出の道を意味している。更衣のみならず、帝もここでは、「かくながらともかくもならむを御覧じはてむ」と、更衣との死別を意識しているのである。しかし、このまま更衣を宮中に引きとどめて、最後まで見届けようという帝の思ひは、穢れを忌む宮中で臣下は死ねないという禁忌を、帝王自らが無視することを意味する。桐壺帝の桐壺更衣への執着は、宮廷と貴族社会の秩序・タブーを、帝王自らが否定するところまでに至らせていた。桐壺帝は

桐壺更衣への愛によって、自己の存在基盤を崩壊させ、自己と女を二人ながらに破滅させるところまで、自己を見失い、追い込まれていた。

ちなみに、引用箇所直前、宮中を退出しようとする桐壺更衣の衰弱した様子を見て、桐壺帝が、「来しかたゆく末おぼしめされず」とあるところは、桐壺更衣の死後ではないが、更衣の衰弱ゆえに死別を予想してのものである点で、御法巻で紫上死後の光源氏が、「すべて来しかたゆく先たぐひなきこちし給ふ」と語られ、「つひに来しかたゆく先も例あらじとおぼゆる悲しさを見つるかな」と思惟していたことと、ともに悲しみと惑溺の深刻さを表わして、呼応するものを持つ。ただ、当座の思惟の混乱性は、桐壺帝の方がまさるであろう。光源氏の場合は、惑溺に陥っている自己のさまを幾分距離を置いて冷静にみている自己がいる。この両者の差は、推量される二十代と五十代との年齢差による女性関係を含めた人生の経験差、および予期悲嘆の差にかかわっているであろう。

だが、この桐壺帝の自己を見失うまでの、更衣への執着も、更衣の薨去後四十九日が済む頃には、悲しみは依然持続しているものの、かつての自己の冷静さを欠いた更衣への対応を社会的に反省できるまでになっている。歎負命婦が桐壺更衣の里を訪問する野分の段で、夜が更けぬ前にと

内裏への帰参を急ぐ命婦に、更衣の母は、つい本音をもらす。亡くなった夫按察使大納言の遺言に従って、娘を宮中に入れたところ、桐壺帝から過分な寵愛を頂戴したが、そのために「人のそねみ深く積もり、やすからぬこと多くなりそひ侍りつるに、横ざまなるやうにて、つひにかくなり侍りぬれば、かへりてはつらくなむ、かしこき御心ざしを思ひ給へられ侍る」と、他の女御更衣の恨みを蒙って、横死のような状態で他界したので、かえって帝の御寵愛がたらく思われる、と、帝に対して礼を欠く、否定的な発言をする。命婦は、これを受け入れながら、帝も同様であると、即座に、桐壺帝の近頃の発言を、母に聞かせる。

「上もしかなむ。『わが御心ながら、あながちにひと目驚くばかりおぼされしも、長かるまじきなりけり、と今はつらかりける人の契りになむ。世に、いさかも人の心をまげたることはあらじと思ふを、ただこの人のゆゑにて、あまたさるまじき人の恨みを負ひしはてはては、かううち捨てられて、心をさめむ方なきにいとど人わろうかたくなになり侍るも、前の世ゆかしうなむ』と、うちかへしつ、御しほたれがちにのみおはします」

(桐壺一四)

短いはずの宿縁であつたから、周囲との摩擦を起こすほどに更衣を過度に愛してしまい、そのため帝王としてはあつ

てはならない臣下の恨みを負い、その更衣にも先立たれて、自分の心を統御できず、ますます偏屈になってしまった、と自己のなした桐壺更衣の扱いを、反宮廷的・反社会的であると認識し、現在の自分の状態をぶざまであると、身近な周囲に繰返し漏らしているのである。桐壺帝の直接の発話でなく、命婦の口を介したもののだが、帝の詞どおりでなく、命婦による加工があるとしても、帝王の詞を中臆宮女の命婦が自由に変更・創作してよいはずもなく、桐壺帝は幾度も同内容の発言をしているというのだから、内容的にほぼ正確な伝達なのだろうとみられる。

こうした、桐壺帝における桐壺更衣との一件についての反省・認識は、何によつてもたらされたのであろうか。更衣死後の桐壺帝の言動をみてみよう。

桐壺更衣死去の報告を使いから聞いた直後、桐壺帝は、「きこしめす御心まどひ、なにごともおぼしめしわかれず、籠りおはします」(桐壺九)と、反応する。岷江入楚が「御門、御愁嘆の體也。夜のおとどなどへ、引きこもり給へる成べし」というとおりだろう。対象喪失直後に、人との接触を避けたり、億劫がつたりするなど、自閉的な態度をとるのは、通常の反応である。^⑩これに続いて、桐壺更衣の愛宕での葬送時に、亡き更衣に贈三位したのも、生前更

衣を「女御とだに言はずなりぬる、あかず口惜しうおぼさ」（桐壺十）れたからで、帝の生前の更衣への処遇に関する後悔・自責の念がうかがわれ、「これにつけても、憎み給ふ人々多かり」とあるように、桐壺帝による生前の更衣に対する異常な寵愛の延長線上にある行為である。

だが、「はかなく日ごろ過ぎて、後のわざなどにも、こまかにとぶらはせ給ふ」（桐壺十一）と、七日ごとの法事などにこまごまと弔問を重ねていったことは、更衣の死の事実を認識していくのに有意な社会的行為であり、同じように、この後に続く野分の段で、「夕月夜のをかしきほどに、出だしたてさせ給ひて、やがてながめおはします。かうやうのをりは、御遊びなどさせ給ひしに、心ことなるものの音をかき鳴らし、はかなく聞こえいづることのはも人よりはことなりしけはひ容貌の、面影につとそひておぼさるるにも、闇のうつつにはなほ劣りけり」（桐壺十一）の部分では、古今和歌集恋三のよみ人しらず歌「むばたまの闇の現はさだかなる夢にいくらもまさらざりけり」を引いて、桐壺帝における現実の桐壺更衣の身体の欠落感を表出しているが、こうした日々日常における更衣についての喪失感も、前述した更衣死後の七日ごとの法事への弔問ともども、更衣の死の事実を認識していく機縁となったのである。

また、野分の段を語るきっかけ・前提となっている、「一の宮を見たてまつらせ給ふにも、若宮の御恋しきのみ思ほしいでつつ、親しき女房、御乳母などをつかはしつつ、ありさまをきこしめす」（桐壺十二）という行為も、更衣を喪った悲しみを慰め、紛らわすのに大いに役立った。というのは、光源氏は桐壺帝と桐壺更衣の愛の結晶、形見であり、また光源氏自身が帝にとって独自の愛の対象だったからである。光源氏の誕生を語る部分に、既にそれは明らかである。

前の世にも、御契りや深かりけむ、世になくきよなる玉の男御子さへ生まれ給ひぬ。いつしかと心もとながらせ給ひて、いそぎまゐらせて御覧するに、めづらかなる児の御容貌なり。∴、この君をば、私ものに思ほしかしづき給ふこと限りなし。（桐壺六）

「めづらかな」「容貌」をもった「玉の男御子」は、両親の前世での宿縁の深さをうかがわせるものであったとともに、右大臣の娘弘徽殿女御の生んだ第一皇子の世間的・政治的な重々しさに対して、「私もの」、すなわち桐壺帝が、一個の人間としての個別的な価値判断に基づく愛情をこの上なく傾ける対象だったのである。しかも、光源氏は、生長するにつれ、三歳のころには、「この御子のおよすけておはする御容貌、心ばへ、ありがたくめづらしきまで見

え給ふ」（桐壺七）とあるように、外見のみならず内面も優れた美質を示すようになっていたのである。であるから、桐壺帝が、「一の宮を見たてまつらせ給ふにも、若宮の御恋しさの思ほしいでつつ、親しき女房、御乳母などをつかはしつつ、ありさまをきこしめす」時の「若宮」光源氏は、亡くなった桐壺更衣の形見としての意味と、彼自身が彼自身の価値において受け止める、桐壺帝の愛の対象としての意味とを、併せもっていたのである。しかも、光源氏の七歳以降十二歳以前に、桐壺帝の宮中に藤壺宮が入内した後、桐壺帝が、「つらつき、まみなどは、いとよう似たりしゆゑ、通ひて見え給ふも、似げなからずなむ」（桐壺二三）と言っていたように、故更衣と光源氏は、顔つき目元がまことによく似ていた^⑩ので、光源氏を桐壺更衣の形見と見るのは容貌からもふさわしいのである。この「一の宮を…」の文の直後にそのまま続いて語られ出す野分の段における鞍負命婦による桐壺更衣の里訪問では、光源氏のもつこの二重性が、多少分裂した趣のまま示されている。

「一の宮を見たてまつらせ給ふにも…」の文に引き続いて、「野分だちて、にはかに膚寒き夕暮れのほど、常よりもおほしいづること多くて、鞍負の命婦と言ふをつかはす」（桐壺十一）と語られる時、「常よりもおほしいづること多くて」の内容は、光源氏についてのものであらうと文の

流れから判断されるのだが、「野分だちて…」の文に引き続いて前掲の「夕月夜のをかしきほどに、出だしたてさせ給ひて、やがてながめおはします。かうやうのをりは、御遊びなどさせ給ひしに、…」で、語られ出すのは、光源氏ではなく母の桐壺更衣なのである。帝の命婦派遣の主目的は、若宮の参内促しであるのに、全体に更衣追慕の念が表出され、特に母北の方の側に大きい。

こうして、桐壺帝がこの時期、光源氏を愛することは、桐壺更衣の形見としてその喪失感を慰め癒すことであり、また深い父性愛を注ぐ独自の対象として、更衣への愛を転移し、その喪失感を弱め和らげる働きをしたのである。

そしてさらに、野分の段で、更衣の里から鞍負命婦が帰参した際、桐壺帝は、次のようなことをしていた。

命婦は、まだ大殿籠らせ給はざりける、とあはれに見たてまつる。御前の壺前裁の、いとおもしろき盛りなるを御覧するやうにて、しのびやかに、心にき限りの女房四五人さぶらはせ給ひて、御物語りせさせ給ふなりけり。このころ、明け暮れ御覧する長恨歌の御絵、亭子院の描かせ給ひて、伊勢、貫之に詠ませ給へる、大和ことのはをも、唐土の詩をも、ただその筋をぞ枕言にせさせ給ふ。

（桐壺十六）

桐壺帝は、その場と帝の気持ちに沿った応対のできる女房

数人と、目前の秋草をみるようにして、ことばを交わしていたのだが、その話題は目前の秋草と、時節の情趣に共鳴し合うこの時期に桐壺帝が常に見入っている長恨歌を絵にしたもの、そして、常の口ぐせになっていた、長恨歌のように愛する女に先立たれた男、特に君主の哀しみをことばにした和漢の詩に関わるもの、そして故桐壺更衣に関わるものであった。この桐壺帝の行為は、「明け暮れ御覧する」、「枕言にせさせ給ふ」のことばから、この時期の帝の常態であつたと知られるのだが、このように愛する人の喪失の悲しみを共感してくれる人たちと語り、また時空を超えて自分と同様の体験をした人たちの事例を理解し、そこに自己を投影し同一視していくことは、自分の哀しみを慰め、故人と自分の関係を冷静に整理し、喪失の事実を受け入れて、喪失後の新しい環境と人生に立ち戻っていく、力となるものである¹³。しかも桐壺帝が「明け暮れ御覧」になつていた絵画化された原作の白居易作「長恨歌」には、感傷詩ながら、楊貴妃を寵愛して玄宗皇帝が政務を怠るようになり、楊貴妃の一族が特別に繁栄し、安祿山の乱が勃発して国家が破綻したことが詩的に表現されているし、漢の武帝が李夫人を寵愛し喪つた事件を詩にした、同じ作者による新樂府「李夫人」には、「鑒¹⁴嬖惑¹⁵也」、武帝が身分の低い女におぼれ惑つたことを後世の天子への戒めとする、

という文言が題に添えてある。桐壺帝は、桐壺更衣の死後、こうした作品詩歌になじむことで、君王としての自分が、父もない、更衣の身分の女を寵愛したことの意味、それが及ぼした周囲への影響、自身の誤りを、冷静に客観的に認識するようになっていったと思われる。

以上のような、桐壺更衣死後の複合した行動によつて、桐壺帝は、野分の段で輓負の命婦が、更衣の母に応じて語つていたような、更衣との関わりを否定面も含めて認識し反省できるまでになつていったのだと思われる。

この段階に至つて、桐壺帝の、桐壺更衣に関する「悲哀の仕事」(mourning work)、すなわち、喪つた更衣に対する思慕の情、くやみ、恨み、自責、をはじめ、更衣とのかかわりの中で抱いていた、さまざまな精神的な関係を再体験し、その心理過程を通して、桐壺更衣とのかかわりを整理し、心の中で桐壺更衣像をやすらかで穏やかな存在として受け入れるようになっていく心理的営みの¹⁶、根幹的な部分は達成されたと、見ておいてよいだろう。

だが、桐壺更衣の死を客観的に受け入れられるようになったからといって、更衣を喪つた哀しみ、追慕の念が消えるわけではない。喪失を受けいれることと、喪失の哀しみとは別のものなのである¹⁷。実際、桐壺帝は、更衣との関わ

りを否定面も含めて冷静に認識していることが示される野分の段で、鞍負の命婦が伝える「仰せごと」の中で、「しはしは夢かとのみたどられしを、やうやう思ひしづまるにしも、さむべきかたなく耐へがたきは、いかにすべきわざにかとも、問ひあはすべき人だになきを」（桐壺十二）、また「御文」の中で、「ほど経ば少しうち紛るることもや、と待ち過ぐす月日にそへて、いと忍びがたきはわりなきわざになむ」と言っている。さらに、桐壺帝は、更衣の母が鞍負の命婦に託した、桐壺帝への贈り物、更衣の用いた「御装束一領、御髪上げの調度めく物」を見て、長恨歌の方士、「幻」術士が楊貴妃の魂を探し出した証拠として玄宗上皇に持ち帰った釵のように、亡くなった更衣の居場所を知らせるものであったのなりと思ひ、そのまま玄宗と楊貴妃のように、「朝夕のことぐさに、翼を並べ、枝を交はさむと契らせ給ひしに、かなはざりける命のほどぞ、尽きせず恨めしき」という思いが語られる（桐壺十七）。以後も、朝政は怠りがちで、食事もはかばかしくは摂れず、近臣たちは、それを非難し嘆くのである（桐壺十八・十九）。このような、桐壺帝の亡くなった更衣への精神的な束縛が、変化を見せるのが、光源氏七歳の年以後、物語では高麗人の相人による覬相と桐壺帝が光源氏の臣籍降下を決意した後、光源氏十二歳での元服以前の時である。

年月にそへて、御息所の御ことをおぼし忘るるをりなし。慰むやとさるべき人々をまゐらせ給へど、なずらひにおぼさるるだにいとたたき世かな、とうとまじうのみよろづにおぼしなりぬるに、先帝の四の宮の、御容貌すぐれ給へる聞こえ高くおはします、

（桐壺二一）

亡くなった更衣を忘れることなく追慕しているのは同じだが、その喪失の哀しみを慰めようと、容貌や氣立て、教養や身分など、故更衣の代わりになりそうな女性たちを入内させたという、積極的な態度と行動が新しいのである。それ以前は、更衣死後の女性関係に関しては、

はかなく日ごろ過ぎて、後のわざなどにも、こまかにとぶらはせ給ふ。ほど経るまに、せむかたなう悲しうおぼさるるに、御かたがたの御宿直なども絶えてし給はず、ただ涙にひちて明かし暮らせ給へば、

（桐壺十一）

と、桐壺更衣の四十九日の頃、桐壺帝は大勢いる他の女御・更衣を召すことも全くせず、更衣を追慕して、涙に濡れる独り寝の日々を過ごしていた。その後続く野分の段では、桐壺帝が、更衣の里から鞍負の命婦の持ち来った更衣の遺品の贈り物を見て、長恨歌の玄宗と楊貴妃に、自分と桐壺更衣とを重ねて、「亡き人の住み処尋ね出でたりけ

むしるしの釵ならましかばと思ほ」し、「朝夕のことぐさに、翼を並べ、枝を交はさむと契らせ給ひしに、かなはざりける命のほどぞ、尽きせず恨めしき」と語られた直後に、風の音、虫の音につけて、もののみ悲しうおぼさるるに、弘徽殿には久しく上の御局にもまうのほり給はず、月のおもしろきに、夜ふくるまで遊びをぞし給ふなる、いとすさまじう、ものしときこしめす。(桐壺十七)

と、語られる。弘徽殿女御が上の御局に参らないのは、帝からの召しがあるのにもかかわらずなのか、召しが特にはない中で、自ら進んで帝に会いにも来ないのか、不明だが、桐壺帝の心的態度と行動は、四十九日前後の桐壺更衣追慕や独り寝の状態とそう大きく変化しているように思われない。この文の後に引き続いて、「人目をおぼして、夜の御殿に入らせ給ひても、まどろませ給ふことかたし」(桐壺十八)とあるのも、哀しみを抱いて独り寝しているさまである。これは、光源氏三歳の年の夏、更衣が亡くなって同年の秋のことである。

それが、光源氏七歳の年には、「今は誰も誰もえ憎み給はじ。母君なくてだにらうたうし給へとて、弘徽殿などにも渡らせ給ふ御供には、やがて御簾の内に入れたてまつり給ふ。ゝ。御かたがたも隠れ給はず」(桐壺十九)と、光源氏を連れて、後宮の女御更衣たちの殿舎を訪問する桐壺

帝の行動が示される。桐壺更衣が亡くなってから四年、この頃までには女御更衣たちの夜の召しも当然再開していたであろう。先に見てきたように、桐壺更衣の死後、野分の段頃までに行われていた、桐壺帝による更衣喪失に関わる諸活動が、帝と更衣の関係の姿と意味を桐壺帝に認識させ、更衣の喪失を帝に受け入れさせるようになっていたが、そのことが、桐壺更衣なき後の後宮へと、桐壺帝の心を戻らせたのである。亡くなった更衣のことを、そして更衣への思いを忘れたわけではないが。

この後の桐壺帝の心的態度・行動のさらなる展開として、前掲の「年月にそへて、御息所の御ことをおぼし忘るるをりなし。慰むやとさるべき人々をまゐらせ給へどゝ」の部分は、ある。現状の後宮の女御更衣たちによつては慰めることのできない、故桐壺更衣への思いを、他の新たな女性によつて満たそうとしたのである。これは桐壺更衣喪失の哀しみから、桐壺帝が最終的に立ち上がっていく積極的な行動であるだろう。宮中に召されながら、結果的に故更衣の代わりとなり得なかった複数の女性たちには悲劇であったにせよ。

藤壺の宮の登場はその成功者としてある。三代の宮仕えを経てきた典侍が、「亡せ給ひにし御息所の御容貌に」「い」とようおぼえて生ひいでさせ給へりけれ」(桐壺二二)と

奏上した「先帝の四の宮」藤壺は、「まことにやと御心とま」つた桐壺帝が見ても、「げに御容貌ありさま、あやしままでぞおぼえ給へる」（桐壺二三）存在であつた。これは桐壺帝と同調した語り手の言であるが、藤壺の容貌などを直接確認できるのは、藤壺側の人々と、藤壺を迎え入れる旧来の後宮側では、桐壺帝と幼い光源氏、そしてごく限られた宮女しかいない。そしてこれは、典侍の言による刷り込み、思いなしでもなかっただろう。少数ながら複数の人による確認であり、前述のように、母桐壺更衣を介して、光源氏と藤壺は似ていたのであるから。

この故桐壺更衣に生き写しの藤壺宮を得て、更衣への思いを慰めようと、桐壺更衣の代わりとなる女性を求めている桐壺帝の心はほほ満たされた。更衣への愛が藤壺宮に転移されたのである。⁽¹⁶⁾

これは人の御きはまさりて、思ひなしめでたく、人もえおとしめきこえ給はねば、うけばりてあかぬことなし。かれは、人の許しきこえざりしに、御心ざしあやにくなりしぞかし。おぼしまぎるとはなけれど、おのづから御心うつろひて、こよなうおぼし慰むやうなるも、あはれなるわざなりけり。（桐壺二三）

しかも、藤壺宮は、后腹の内親王である。桐壺帝は誰にも非難されることなく、存分に藤壺宮を寵愛することができ

た。桐壺更衣では不可能だったことが藤壺宮では満たされた。桐壺更衣での心理的欠損が、藤壺宮により補償されたのである。入内時、十代の半ばほどの年齢であつたらう藤壺宮は、生前の桐壺更衣入内時の年齢とそう違わないところにいたであらう。桐壺帝において、二人は一段と同一視されたはずだ。「おぼしまぎるとはなけれど、おのづから御心うつろひて、こよなうおぼし慰むやうなるも」当然のことだったのである。

ここにおいて、桐壺帝の、桐壺更衣に関する「悲哀の仕事」は、完全すぎるほどに成就した。藤壺宮を得て、桐壺更衣はより完全な姿で再生したのであるから。これ以後、桐壺帝によつて桐壺更衣が思い出されるのは、光源氏十二歳、光源氏の元服時を最後とする。

大藏卿、藏人つかうまつる。いときよらなる御髪をそぐほど、心苦しげなるを、上は、御息所の見ましかばとおぼしいづるに、たへがたきを、心強く念じかへさせ給ふ。かうぶりし給ひて、御休み所にまかで給ひて、御衣たてまつりかへて、下りて拝したてまつり給ふさまに、みな人涙落とし給ふ。帝はた、ましてえ忍びあへ給はず、おぼしまぎるるをりもありつる昔のこと、とりかへし悲しくおぼさる。（桐壺二四）

成長した息子光源氏の姿に、帝が「御息所の見ましかばと

おぼしいづるに」とあるように、生母としての更衣を思い出したと言つてよいのであろう。髪型から服まで大人の姿になった光源氏の拝舞するさまを見て、「みな人涙落とし給ふ。帝はた、ましてえ忍びあへ給はず」とあるのも、父としてである。「おぼしまぎるるをりもありつる昔のこと、とりかへし悲しくおぼさる」も、この光源氏を子として得るに至つた、母更衣とのさまざまな事件、思い出、因縁が、胸痛い思いとともに想起されてきたのである。二人を結びつける光源氏をとおして、桐壺帝は桐壺更衣との過去を思い出している。

この光源氏元服の場面以後では、桐壺巻末に、「内裏には、もとの淑景舎を御曹司にて、母御息所の御方の人々、まかで散らずさぶらはせ給ふ」(桐壺二七)とある、「まかで散らずさぶらはせ給ふ」の主体が十二歳の光源氏でなく、父桐壺帝であるならば、その時の桐壺帝の意識に故桐壺更衣が存在していたといえるばかりである。

三 父桐壺帝と息子光源氏の喪失体験

こうして光源氏の父、桐壺帝の桐壺更衣に関する喪失体験は、更衣のより完全な再生ともいえる藤壺宮を得て、劇的な結末を迎えるが、これは、光源氏の紫上に関する喪失体験を理解するうえで、どのような助けとなるであろうか。

本稿のはじめで、両者の喪失体験がつながりをもっているであろうことを述べた。父から息子への生き方の系図の問題、生前の母と父の物語の宮女や侍女たちを介した光源氏への伝承、帝王としての父の女性関係の、意識的無意識的の息子への投影、最愛の女性を喪った父と息子の、女の魂の所在を、長恨歌の「幻」術士に託す内容の詠歌を二人ながらにする呼応など、その蓋然性は十分予想される。

そして、その両者の喪失体験と悲哀の仕事の、重なり具合とずれ具合を、今ここで詳細に検討する余裕はもうないが、概括的に述べておくならば、光源氏は、桐壺帝と異なり、紫上の即日葬送の指揮を執つた、喪主である。野辺送りにも出向いている。光源氏は父と同様最愛の女性を亡くして深い悲哀に沈んだが、喪主として葬送の指揮・外部からの弔問の対応など、悲哀を抑え込む社会的圧力と内的自律を余儀なくされた。是は光源氏の悲哀の仕事を助ける力となった。父と息子はともに最愛の女性を喪う前に、それを予期させる女の衰弱・長患いを体験しているが、光源氏はさらに若菜下巻での紫上絶息の体験を経ている。紫上喪失に対する心の準備、「予期悲嘆」が父の場合以上に事前に行きわたらうと推測される。それゆえ、悲嘆は深いながら、事態を客観視し得、紫上の死を受け入れて、日柄の關係もあつたろうが、即日葬送や、人目に対して自分を保

とうとする冷静さを持てた。父と息子が最愛の女の喪失後、人目を避けて籠ったのは共通しているが、帝王としての父はいつまでもそれが可能であつたろうとは考えられない。准太上天皇として政治面からは隠居したような位置にいる息子は、一連の弔問対応が済んだあとは、「女方」、奥向きの部屋、かつて紫上の居室であつた仏間に一周忌を越えても籠りつづけた。その間侍女たちと故人の思い出話をして自己と故人とのかかわりを再確認し、かつ認識を深めた⁽¹⁷⁾。父における光源氏や更衣の遺品、息子における二条院の紅梅と桜、匂宮、侍女中将の君という、それぞれにおける故人の形見が、それぞれの喪失の悲哀を慰め、それぞれの悲哀の仕事を助けたとみられる点も共通する。父も息子も最愛の女性を喪失した後、他の女を遠ざけ独り寝を重ねたが、しばらくして他の女の関心を復活させる。と言つても光源氏の場合は、遠からずの出家を考えているので、新たな女性、紫上の代わりを求めることはなく、三月の六条院の他の妻たちへの訪問、四月の賀茂祭の日の中将の君との和歌の贈答、十一月の豊明の節会における青年期の逢瀬の回想に、それがうかがわれる程度のものである。悲哀の仕事の果てに、父は最愛の女の身代わりを得たが、息子は最愛の女を喪つたまま、女への思いを慰められることなく、出家という形で物語舞台から退場していった。さらに概括して

言うなら、父の場合は、若い帝王としての喪失体験と悲哀の仕事であり、息子の場合は、青年期からの幾多の喪失体験を経てきた人生の果ての、晩年における最愛の女に関する喪失体験であり、悲哀の仕事であつた。

二人の喪失体験は、現代の精神分析の視点に耐える語られ方がしてあり、二人の言動によって、その心理や変化の動きを推測することが可能だ。父と息子の人生最大の喪失体験は、互いに呼応しつつ、二人の立場、人生におけるその喪失体験の位置・役割に応じて、差異を生じている。

光源氏にとつての紫上の意味、人生の意味は、前史である父桐壺帝の喪失体験、光源氏自身の青年期からの喪失体験の蓄積のさま、それらとの比較を見ていくことで、明らかになると思われるが、ここで概括したことの詳細とその性格・意味を含め、それらの検討は、機を改めて論じたいと思う。

注

(1) 源氏物語の引用は、『源氏物語大成』校異篇により、適宜表記を改めた。漢数字は頁数。

(2) 小此木啓吾氏『対象喪失 悲しむということ』(中公新書 557 28頁)

(3) 小此木啓吾氏前掲書34頁。

(4) 池内裕美氏『第18回公開講座 遺品や形見の持つ意味―対

象喪失の心理』『セ・ミ・ナー年報 2006』、参照。

- (5) 渡辺仁史氏『源氏物語』試論―対象喪失と「慰め」―
〔文芸研究〕15、一九八七年五月は、桐壺帝以下薫までの対象喪失をとりあげて、その喪失による悲嘆を、「ゆかり」など他の人物に関わっていくことで「慰め」を希求するといふ、独自の様態を、源氏物語はもっているといわれる。対象喪失をとりあげておられるが、「慰め」「慰む」とその派生語の用例を軸に論を進められており、本稿とは方法も目的も異なる。

(6) 益田勝美氏「日知りの裔の物語」『火山列島の思想』。

(7) 拙稿「光源氏の『隠ろへ忍ぶ』女性たち」本誌十九号、二〇一二年十一月、参照。

(8) 益田勝美氏前掲書、参照。なお、岷江入楚（国文学註釈叢書）は、引用箇所に先んじる本文の「限りあれば、さのみもとどめさせたまはず」部分に注して、「或抄云 禁中は、神事所の故也云々」という。

(9) 同様の例に、入水を決行しようとした浮舟についてのものがある。回想中のことばであるゆえに、当時の混乱性を一層思うべきだろう。

いといみじ、ものを思ひ嘆きて、みな人の寝たりしに、妻戸を放ちて出でたりしに、風は激しう、川波も荒う聞こえしを、一人もの恐ろしかりしかば、来し方ゆく先もおぼえて、簀子の端に足をさしおろしながら、行くべき方も惑はれて、帰り入らむも中空にて、

(10) 松井豊編『悲嘆の心理』第三章 死別体験者の悲嘆について ―主として文献紹介を中心に（平山正美）、の被紹介説。

(11) 小此木啓吾氏前掲書57頁、参照。

(12) 『岷江入楚』に早く「秘」抄を引いて、「源氏の君のつらつきまみなとはよく更衣に似給ひたりしか今又藤壺を御覧するに更衣によく似給ひたれば源氏のかほかたちにもゆるなからすかよひて見え給ふとなり」とある。玉上琢弥氏『源氏物語評釈』がいうとおり、敬語使用によつてこう解釈される。当該文の後半部「通ひて見えたまふ」に、「かよひきこえためる」（河内本・陽明文庫本）、「かよひて見給」（阿里莫本）などの異文があるが、前半部「つらつき、まみななどは、いとよう似たりしゆゑ」は、「まみななどは」の「は」が「の」であったり（河内本・陽明文庫本）、欠けていたり（阿里莫本）、「いとよう似たりしゆゑ」が「いとよくにたりし人ゆへ」（陽明文庫本）とあつたりするものの、いずれにおいても、光源氏母子が似ていたという関係は動かない。

(13) 小此木啓吾氏前掲書59頁、および128〜130頁、参照。

(14) 小此木啓吾氏前掲書45〜46頁、参照。

(15) 小此木啓吾氏前掲書151頁、参照。

(16) 小此木啓吾氏前掲書151頁、参照。

(17) 拙稿「光源氏の述懐―御法巻と幻巻の間―」本誌十六号、二〇〇九年十一月、参照。